

今声を上げよう

学校法人駿台甲府学園駿台甲府中学校三年 志村 美波

私には好きなユーチューバーがいます。その人は海外に住む日本人男性で、現地での生活の様子を動画で発信して活動しています。海外での暮らしという苦勞も多いように思えますが、動画の中の彼はいつでも楽しそうでした。そのため、生活する上での大きな問題は特別ないように思えました。

ある日のことです。いつものように彼の動画を見ていたところ、突然、ただ歩いていただけの彼に、唾を吐く人が現れました。あまりに急なことに私は驚きましたが、唾をかけられた彼はあまり気にしておらず、むしろ、よくあることのような様子でいました。正直、何が起こったのか私にはすぐに理解できませんでした。突然だったということもありますが、何よりその唾を吐くという行為の意味がわからなかったのです。数秒経ってからようやく、「今彼は、差別を受けたんだ」ということを理解しました。俗にアジアンヘイトと呼ばれているものです。理解すると同時に複雑な感情が湧き上がりました。アジア人というだけで差別されることへの悲しさや怒り、同じ日本人である私も被害に遭うかもしれないという恐怖。そして、その差別が日常茶飯事と言わんばかりの彼の態度へのやるせなさ。彼が動画で楽しそうでいられるのは、何も問題がないからではなく、その状況を受け入れているからでした。もしかしたら、それも海外で生き抜いていくための術なのかもしれませんが、差別に慣れてしまうということは何か悲しく思えました。

私は彼の動画をきっかけに、同じアジアの血が流れる者としてアジアンヘイトをさらに知る必要があると思い、現地でのアジア人差別の現状を調べてみました。中には差別の経験がないという人もいましたが、多くの人が差別の被害に遭ったことがあり、心に深い悲しみを抱えていました。この時私は、初めて人種差別の現実を知りました。動画内で彼が差別を受けたときにすぐに反応出来なかったのは、自分が人種差別について無知であったからだということを実感しました。そして、そんな自分がとても恥ずかしくなりました。アジア人だけに限ったことではなく、世界でこんなにも肌や髪、目の色だけで差別されることに苦しむ人がいるのに、私はその恐ろしさをよく考えたことがなかったのです。街を歩くだけで、殴られたり蹴られたりするかもしれないと怯えながら過ごす日々。公共交通機関を利用したときに、同じ人種の人を見つけて思わず

安堵してしまうという感覚。差別を受けたことのある人たちにしか分からない辛さがそこにはありました。

しかし、そんな辛い状況下でも、差別に勇敢に立ち向かっている人たちがいました。その人たちは、多種多様な人種が共存してきたからこそ根強い人種差別が残るアメリカのニューヨークで、必死に声を上げていました。

「全世界に私たちに起きていることを知ってもらうために叫んでいる。今私たちは、ここで変化を起こす。」

と。その言葉で私は気付きました。彼らが勇気を出して、世界に差別の現状に気づいてもらおうと動いているのに、私たちがただ差別を受け入れているだけでは、意味がないということにです。あの動画の中での彼は、差別を慣れた様子で受け流していました。しかし、差別はそれでは永遠になくなりません。自分たちで差別について声を上げ、話し合う機会を作っていかなければいけないのです。

もし差別を受けても、以前の私だったら行動を起こさないかもしれません。差別をするのは一部の人であり、そういう考えを持たない人も大勢いる中で、行動するまでのことではないかと思っていただけからです。でも、今ならそれではいけないと分かります。差別に対してきちんと声を上げるべきです。差別をするのがごく一部の人でも、差別に遭うことが多くても少なくても、差別が行われているという事実はそこにあります。まず声を上げて、その事実気づいてもらわなければいけません。そうしないと、そもそも差別が起きているということすら知ってもらえずに、差別は次の世代に継承されていきます。その確固たる例がまさに、アジアンヘイトだと私は感じます。最近になってアジアンヘイトが注目されるようになりましたが、思えばずっと前からアジアンヘイトはありました。ではなぜ今までその存在を知らない人が多かったのでしょうか。声を上げてきた人が少なかったということも、一つの要因かもしれません。そこにある差別に対して、無意識に容認してきた結果が今ここに表れているのです。差別を少しでも無くしていくためには私たちが、差別を「そういうものだからもう仕方のないことだ。」と受け入れるのではなく、差別に立ち向かう勇気を振り絞ることが必要です。声を上げないと何も変えることはできません。私はこの作文で人種差別反対への意思表示をします。皆さんはいつ声を上げますか。